

<総評>

若葉が萌出る頃。今月は生活の中でふと気づく瞬間の、生命感情のようなものに魅かれました。色彩や音、匂い、触感、また疲労や食欲のような実感です。

人魚姫に戻りかねない波の花

---

南風 東京都

——白波を白馬に見立てた詩があったが、この句はもっと印象的にぴったりの感じがする。人魚姫も波も花も果敢ない。波の花は潮が泡立っているさまを言う日本の詩語だが、いつどれがどう変身してもおかしくない。

にんげんに化けて名字を笹舟に

くくればゆびさきから靄がかる

---

松下 誠一 東京都

——にんげんに化けたのは狐か獺か。人にしても名字という識別票をくくられていなければ自分自身が危うい。

地元よりも大きく響く

東京の 夕方 5 時の音楽のこと

---

佐々木みつる 東京都

——大きく響くのは気のせいだろうか。東京というメガロポリスの声量が大きいのか。そういえば「はとバス」の待合の音楽は大音量だった。

転校が決まった子は

理科室みたいに

不思議な匂いがした

---

翠 東京都

——理科室は調理室などとは違って人間臭が無い。ひんやりとして整然と並べられ識別さ

れたフラスコたち。転校が決まった子は早くも識別され分けられてしまったのだろうか。

台所に座り込みたる母よ母  
死火山みたいに微笑まないで

---

からすまゝ 神奈川県

——母は家庭の中心で常に生活のマグマを供給する存在であるべきと思われている。人間である母が疲れ果てたとき、「死火山」という比喻はこれ以上無いほど適切だろう。

ひらがなに漢字を

開いてゆくときに

と一んと抜け落ちて

いつてくれる何か

---

からすまゝ 神奈川県

——漢字をひらがなにするだけで変わるもの。それが何なのかはその時々だが、「と一ん」というオノマトペは多分かけがえがない。

父葬りまた行き過ぎる蟻の列

---

田崎森太 東京都

——親しいものが、見えないかそかなものになって過ぎていく。いま通っていく蟻の列がそれかも知れない。自然の営みの不変も同時に感じられる。

ハンカチの木に鰐登り望郷す

---

田崎森太 東京都

——ハンカチの木は白い布のような花を咲かせる熱帯性の木。どちらも動植物園にいるの  
だろう。鰐は実際には登れないのだが登ってハンカチを振りたい。哀愁とユーモア。

(バカマヌケ)

手話の喧嘩で

(アホノロマ)

忍法をかけ合う河川敷

---

Flim 東京都

——手話で喧嘩をするということに想像力が追いつかなかった。言葉を扱うものとして不  
明でした。「忍法をかけ合う」ように見えるのにも納得。大声はどうするのだろうか。

あいやのほろほろ

田んぼの土どろ

麦わら帽子は

あせみどろ

---

小井 詩文 京都府

——「あいやのほろほろ」という、身を守る護符の呪文のような一行目。農作業にいかにも  
ふさわしい。耳に忘れられないかけ声。

ロボットに敗れた碁打ち寒牡丹

---

藤 雪陽 長野県

——藁囲いに囲まれ、寒さに耐えて咲いている寒牡丹のような棋士の世界。対する IT のあ  
っけらかんとした有り方が鮮やかな対照を見せてくれる。

豆飯の豆の密集してるそこ

---

藤田 ゆきまち 三重県

——釜のフタを開けたとたん、目が吸い寄せられるのはそこ！生活の一瞬一瞬の積み重ねの中でほかに何も考えられないという瞬間。

この髪を短く切れば

夕暮れは

マッシュルームのように優しい

---

まちりこ 埼玉県

——ショートカットの髪はさっぱりとしながらゆらゆらと顔を包む。薄明るいたそがれに守られている感覚。